観察はかなり詳しい。頭蓋骨、その他に見られるように、変異のあるものを幾つか並べて比較している。耳小骨は三個である。この点では J.A. Kulmus 著 "Ontleedkundige Tafelen" の記載とは異なり、筆者がすでに指摘したごとく、Kulmus の場合は小児を解剖したと思われる。槌骨と第七脳神経との関係（脳神経は第九対まで）を示しており、かつ、その解剖がかなり困難であったことが察せられる。

以下、図の順序に従って説明する。

（名古屋大学医学部解剖学第一講座）

佐賀藩の輸入医学書

酒井シヅ

佐賀には、幕末、蘭方医学がいかなる動機で、どのような形で取り入れられ、定着していったかをよく示す資料が残っている。それらはすでに『鍋島直正公伝』をはじめ、いくつかの成書で触れられている。著者もまた佐賀藩の蘭方医の動静、蘭学塾の成立ならびに医師登録の実態について報告してきた。今回は佐賀藩が購入した医学関係の蘭書について、それがどのような性格のものであったかを述べるが、それに先だって佐賀藩の蘭方導入過程の概略を以下に示した。

佐賀藩において藩の医学寮が建てられたのは、天保五年（一八三四）七月十六日であるが、そのきっかけになったのは、文化六年（一八〇九）に古賀穀堂が提示した「学政管見」と題する学術奨励の意見書である。そのなかで医師が自宅でめいめい勉強していても効果のほどはおもわしく

ない、肥後では医学館があってそこで稽古が行えるから、高名な医師が輩出するのだと、医学館の設立の必要を説いた。それを受けて医学寮が発足したが、医師の出席は芳しくなく、さしたる成果をあげることができなかった。

この時期の蘭学に対する藩士の関心は低かった。穀堂は天保四年五月七日の日記に「西洋社中の萎靡して至る者なし」と記す。佐賀藩が実際に蘭学取入れに積極的になるのは天保九年（一八三八）頃からである。幕府のいわゆる蛮社の獄の起こる前年である。この頃から佐賀藩は蘭方導入に急激に傾き、天保十四年（一八四三）に蘭方医伊東玄朴を藩医に迎えている。佐賀藩では幕府の蘭学統制に関係なく蘭学を導入し、嘉永二年（一八五一）に課業法が出され、医師は医学寮で学習することが義務づけられ、医学寮が再建され、それに蘭学寮が付設された。

佐賀藩には膨大な洋書を購入したことを示す洋書目録が残る。洋書目録に関しては、板沢武雄がすでに『日蘭文化交渉史の研究』に「佐賀鍋島元侯爵家蘭書目録」と題して発表した。その時の解題にこの目録が福井久蔵学習院大学教授の写本を写したもので、原本が見あたらないと記す。しかし、原本は現在、佐賀県立図書館に所蔵され、板沢の目録にはない書き込みが見られる。

板沢の調査によると、佐賀藩の蘭書は

(1)兵書一五五冊（二一・二％）
(2)雑書一七五冊（二三・九％）
(3)船学書三五冊（四・八％）
(4)詞文並びに文法書一〇一冊（一三・八％）
(5)天文地理書二六冊（三・六％）
(6)分離書四八冊（六・六％）
(7)医書七二冊（九・八％）
(8)度学算学書八八冊（一二・〇％）
(9)理学書三二冊（四・四％）

に分類され、七三二冊からなる。医書の占める割合はわずか九・八％であり、幕末の佐賀の蘭学が兵学中心であったことが、この蘭書の数からも類推できる。

この蘭書がいつ購入されたかは定かでないが、おおよその時代は目録にある帯出者の書き込みから想定できる。上述したように蘭学寮ができたのが、嘉永四年（一八五一）

であり、それ以後に違いないが、記録にある最初の帯出の年月日は「安政三年辰五月八日　杉田雍助節用集」である。また購入の最後は「文久元年酉六月」である。これからみて安政年間（一八五四～六〇）から文久一年（一八六一）に購入されたものと想定される。目録は、(1)発行年、(2)著者、(3)原本の題名、(4)本の種別の順で記録されている。

購入された本の発刊年を見ると、一七〇〇年代は、一七六八年の馬医書と一七八二年刊の内外書の二部である。他は一八一〇年代一部、一八二〇年代が二部、一八三〇年代が一二部、一八四〇年代が一五部、一八五〇年代が三七部である。全六九部のうち三七部が五〇年代のものであった。

しかし、そのうち邦訳されるなど、広く一般に活用されたものは、セバスチアーンの生理学書、オンセノールドの眼科書ならびに外科書、フーフェランドの内科書、フレスの解剖書と限られている。だが、それ以外の本にも帯出者の記録をみる。以上の他、佐賀藩が購入した蘭書の内容一覧を提示する。

（順天堂大学医学部医史学研究室）

海上随鷗の在坂期間再考

中山　沃

海上随鷗（一七五九～一八一一）は文化三年（一八〇六）に江戸から京都に来て蘭学塾を開いた。この年の五月に小森桃塢と藤林普山はこの塾に入門した。しかしやがてどのような理由があったか不明であるが、大坂に移った。随鷗と同郷（鳥取）の歌人香川景樹（一七六八～一八四三）の日記によって文化四年（一八〇七）十月初旬から文化五年五月九日まで在坂していたことは明らかである。その後再び京都に帰り、文化八年（一八一一）正月十六日、五十四歳で死去した。京都へ帰った年月も明らかでない。

私は次の二つの資料によって、随鷗は少なくとも文化三年（一八〇六）十一月から文化六年十一月まで在坂していたと推量する。

一　武元君立（一七七〇～一八二〇）の遺著『北林遺